

槐

かい

岡井省二創刊

平成25年6月号

平成二十五年六月一日発行 第二十三卷第六号 通巻第二六四号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



金色の布袋

高橋将夫

山焼の炎は高みを目指すなり
魂の影を映して春障子
牛の乳搾り建国記念の日
地震より大きく揺らす半仙戯

宇治橋

佐保姫と夢の浮橋渡るかな

黄檗山万福寺

金色の布袋さまにも春愁

「円虹」五月号より五句

春の川未来が流れきては去る

燕の子人の子もいま食べ盛り

春惜しむ母校の門を出るごとく

春眠の時も含めて一生涯

花万朶宇宙に隠れなき地球

槐安集

水野恒彦

鞆鞭を蹴りあげて穹ゆらぎをり
鶴引くや眠れぬ夜は眠らない
生涯の嘘とまことと春の霜
日輪は古く新し鳥の恋
わが袴りさまよひ落つる雪解川

延広禎一

流し雛補陀落に向く日差しかな
梅林の方から霽るる密寺かな
五芒星を額にいただく海女あたり
春月の桃色ぼかしヨイトマケ
梅花祭の舞妓芸妓や鯉跳ねる

加藤みき

逝きし人送る袖に新芽かな
鋭き一声あとむあむあと春の闇
花うぐひ軍靴のやうなスニーカー
ひひ鳴きを声明の間に二度三度
逃水にきれいな足のハイ・ヒール

石脇みはる

春塵の水の流れにさからはず
春寒やチーズホンデュの熱々を
永らへし身をやつしたる春拾
生きるものみな尊しや松の花
無造作な仕草となりし鳥雲に



中島陽華

藥罐 たつぷり寒の水高野口
春一番 梵天上がる南座に
春暁や巫女のまなこに五芒星
楡の木 の 縞臯なりパンの耳
花祭か に ばばしたる子を抱いて

雨村敏子

ゆく水に淀みなかりき松の芯
紙風船 突くや平坂越えてゆく
骨壺 やいのち抱ける春の土
一斉に 青草みたり石工村
琅玕や墓は 作らず花の山

竹内悦子

小野小町の切手貼りをる四温かな
涅槃西風熱き蒟蒻食しにけり
揚げたてのポテトチップス鳥雲に
恋猫の一匹はもう寝てをりぬ
山櫻きのふの花に飽いてをり

本多俊子

梅咲きぬ生きる力のおもしろし
五銛杵はわが胸中に春の山
白れんの白につのりし重さかな
余寒なほちりめんじやこの白さかな
秘仏にも人恋しさは御開帳

近藤喜子

蝶々や我なら遠く行く風に
春愁や開けてはならぬ箱のあり
春の夢わが深層の現るる
身の奥の毒ぬけてゆく沈丁花
灯の下に夜の椿となつてをり

谷村幸子

記念樹の辛夷の咲くを見にゆかん
神木の一位櫛なり仰ぎみる
笑ひ声聞きて入りけり春障子
ゆつたりと発声練習草萌ゆる
大壺の唐草模様春日さす

瀬川公馨

墨堤を駆く火先空海の肉筆
雲雀笛さらりと吹いて行きにけり
墨堤＝瀬川公馨の堤
蝶蝶の高野百里に挑みたる
菱餅の追随ゆるさぬ利かん坊
南無三や大蛇ゆつくり穴を出づ

久保東海司

東風荒さび砂丘満面人容れず
軒先の暗さ封じる梅白し
凍て筆を噛みて一字に背を正す
白梅や風の落ち込む溪暮れて
都をどり棧敷に鬢のほつれ揺るる

中野京子

ぼつてりと白雲一つ雛祭
大伽藍に仏と人と春の日と
好日の笑顔三色すみれかな
人と犬石も一つにあたたかし
開万福寺詠 柳さんの三毒ぬの玉や春一番
開柳 魚板

柳川 晋

蒙もっ古こ来る霾天越しの高笑ひ
目を覚ます魚板が春の夢を吐く
初花はつやはつ発はつと心の開く音
一山の目方は変へず桜かな
秘仏にも野の仏にも春の宵

岩下芳子

風ありて天の半分花曇
落合ひの水た走りて春の海
秘仏拝す若狭小浜の彼岸寺
蛤の大きいなる息かかりたる
春耕の土生きてをる日の光



槐市集

谷岡尚美

山門に入るや布袋に春きざす
韋駄天の走り出すかに春の空
丹の橋を渡り受験の男子かな
弾丸と怒濤ありけりラガー達
春宵の戯曲は三島由紀夫なる

寺田すず江

天日や春のいのちの銚めきぬ
仏頭の面差しおぼろ朧かな
それぞれの行き方ありぬ青き踏む
遠汽笛名残の空に鳥帰る
寄居虫の吾が家は此処と澄ましぬる

時澤藍

霾や命の気配隠れをる
門川の流れはすでに春の音
浅春や衆生やはらぎ始めたり
春光に青冴え冴えとフェルメール
春蘭に心の動く齡かな

中貞子

真昼間の花まんだらやチューリップ
崖縁に追はれし夢や猫の恋
啓蟄や醜草の根の重たかる
春の日の暮れのこりたる花屋敷
湯の花に心身浸れる朧月



槐集

高橋将夫選

来るものを拒まず春野輝けり
岡崎 岩月優美子

春興や重たきものを脱ぎ捨てて
次の世の明るさ透かす春障子

曇天に笑ひ損ねし春の山
柳絮飛ぶ吾が魂もいつか飛ぶ

春眠のブラックホール抜け切れず
喜屋川 前田美恵子

魚柳の鱗うろこに春の光^ヲ
振り払ふ過去に春霞淡きかな

朧夜や欲得も無き余生たる
虫眼鏡春陽をひとつにして見せる
いつせいの芽吹は山のかゝならむ
枚方 熊川 暁子

初蝶にまだ影のなき石舞台
白椿すべり落ちたるメランコリー

さくら咲く前世来世のまん中に
名刹の尊きものに隙間風

紅梅の蕾の高さへ子を抱けり
枚方 近藤 紀子

人磨呂忌笹の葉をうつ春あられ
観覧車に乗つてみたいと田螺いふ

葱坊主に自立の姿ありにけり
黄檗の春にうそぶく石の牛

風の子の野遊びの野に呆けをり
京都 竹中 一花

洛西の峰の西行櫻かな
笙太鼓音色もろとも雛納

荷になつて鯖の道ゆく櫻鯛
恋猫の恋の迷ひや宇治十帖
火の色の祈願袋や玉椿
大阪 江島 照美

仕舞屋を抜けて禅寺燕来る
君がため春を歌うて宴終はる

人の世はかくのごときと山笑ふ
風神の煽るとんどの刃かな

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

来るものを拒まず 春野輝けり 岩月優美子

全てを受け入れる春野のおおらかさをよく言いとめている。

「槐」もかくありたいものだ。

〈次の世の明るさ透かす春障子〉では、障子の向こうに明るい未来がある。〈曇天に笑ひ損ねし春の山〉の句は、「曇天に笑ひ損ねた」という発想がユニーク。「花曇」「鳥曇」など、とかく春はぼんやりした曇りが多い。〈春興や重たきものを脱ぎ捨てて〉〈柳絮飛ぶ吾が魂もいつか飛ぶ〉、どの句も春の明るさ、かろやかさがおおらかに詠み込まれている。

虫眼鏡 春陽をひとつにして見せる 前田美恵子

虫眼鏡の焦点を紙にあてると、紙のその部分が焦げる。そんな遊びをした子供のを思い出す。それにしても、「春陽をひとつにして見せる」とは、よく言ったものだ。

〈春眠のブラックホール抜け切れず〉は、ある意味で春眠の本質に迫ってしまふ。(振り払ふ過去に春霞淡きかな) 〈朧夜や欲得もなき余生たる〉には、これまでの人生、これからの人生を見据える自分がそこにいる。

いつせいの芽吹きは山のごゑならむ 熊川 暁子

「一斉の芽吹きは山のごゑ」は春の山のざわざわとした感じをよく捉えている。〈初蝶にまだ影のなき石舞台〉は初舞台の蝶の影の薄さを、〈白椿すべり落ちたるメランコリー〉は春の憂鬱をうまく表現している。

観覧車に乗つてみたいと田螺いふ 近藤 紀子

「観覧車に乗つてみたい」と言ったのが田螺であるところが愉快。誰かに無理難題をふっかけられたのかも知れない。

〈葱坊主に自立の姿ありにけり〉もほほえましい。

笙太鼓 音色もろとも 雛納 竹中 一花

雛をしまっている景。雛だけでなく笙や太鼓や飾り物もしまうわけだが、笙や太鼓の音色まで一緒にしまつたと捉えたところがおもしろい。

火の色 の 祈願袋 や 玉椿 江島 照美

祈願袋に何の願いをかけたのかは知らないが、「火の色」というから燃えるような思いなのだろう。取り合わせの玉椿がよく効いている。〈君がため春を歌うて宴終はる〉〈人の世はかくのごときと山笑ふ〉〈風神の煽るとんどの刃かな〉の句は、どれも作者ならではの視点があがる。

涅槃 西風放生池に宇宙見る 山根 征子

黄檗山万福寺の吟行句。作者は放生池のあたりに一つの世界、一つの宇宙を見た。そして、そこに春の命を見たのだ。〈生も死も放生池に春生るる〉

黄金のジパング 黄砂の最中なり 中田 禎子

かつては黄金の国とマルコポーロの「東方見聞録」に紹介された日本だが、今やその時の黄砂でない黄砂にみまわれている。(以下略)